様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 16 日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：１９３２０１２３
研究課題名（和文）　近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究
研究課題名（英文）The fundamental study for social system and changes in population during the Edo period indicated by gravestones and old documents for demography

研究代表者
関根　達人（SEKINE TATSUHITO）
弘前大学・人文学部・准教授
研究者番号：００２４１５０５

研究成果の概要（和文）：
最北の近世城下町であり、日本海交易の北の要であった、北海道松前町に所在する近世墓標 5629 基（11862 人分）と 3 ヵ寺の寺院過去帳（13651 人分）の調査を行った。得られたデータを中心に、関連史料を駆使し、津軽海峡を越えて行き交う人・物（石材・骨壺）・情報の実態を明らかにするなかで、松前の人口変遷と、近世社会≪家・藩（地域）・国家≫の姿を描くことができた。

研究成果の概要（英文）：
We researched all gravestones and necrology belonging to the Edo period in Matsumae, Hokkaidou Prefecture, where was the northernmost castle town and the north important position on the trade over the Sea of Japan. We could explain the changes in population and the social system of early modern period in Matsumae by comparing more than ten thousand records of dead persons with documentary historical materials

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
２００８年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	10,900,000	3,270,000	14,170,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：歴史考古学

１．研究開始当初の背景

(1)墓には、故人の亡骸とともに、過去の社会を復元するための様々な情報が埋め込まれている。本研究が対象とする近世墓は、かなりの頻度で地上に建てられた墓標を伴っているという点で、中世以前の墓と大きく異

なる。さらに近世墓に関しては、墓に対応する形で故人を記録した過去帳が残されている場合も少なくない。近世墓は、埋葬施設・副葬品・遺体といった地下の情報に加え、地上に建てられた墓標や過去帳などの史料をもとに、総合的に考察することが可能であり、一般に地下の情報だけしか残されていない中世墓に比べ、その社会構造を反映した情報を格段に多く内包しているといえる。

(2)大名墓など一部の墓を除けば、近世墓は文化財としての価値が確立していない上、現在も縁者により管理されていることが多いため、中世以前の墓に比べ、発掘調査により地下の情報が明らかになるケースはさほど多くない。しかしこのまま少子化により家の断絶が進めば、無縁化する墓はより一層増加し、近世墓標の多くは歴史資料として記録されないまま、近い将来姿を消しかねない。

２．研究の目的

(1)近世墓を材料として、それを生み出した近世社会の構造を理解する。

(2)近世社会の人口動態を明らかにする。

３．研究の方法

(1)埋葬施設・副葬品・遺体といった地下の情報、地上に建てられた墓標、過去帳という３種類の情報を重ね合わせる方法をとる。具体的には、はじめに墓標や過去帳に記された文字情報を手がかりとして、被葬者の没年や性別、社会的・経済的状況を把握し、それが墓標の大きさ・形状・材質、埋葬施設、副葬品といった非文字情報とどのような対応関係にあるのかを明らかにする。次ぎに墓域や地域社会（村や藩）ごとにその特徴を検討し、近世社会の構造的特徴を考察する為の基礎資料とする。

(2)墓標や過去帳から得られる死者数に関する情報と、生者の記録である人別帳・宗門改帳などの人口史料を比較検討することで可能となる。人口動態の問題に関して墓標から推測可能な数値としては、男女の比率と死者数を用いる。

４．研究成果

(1)最北の近世城下町であり、日本海交易の北の要であった松前に所在する近世墓標を主軸に据え、寺院過去帳をはじめとする関連史料を駆使することで、この地に骨を埋めた人々を通して、彼らを取り囲んでいた社会≪家・藩（地域）・国家≫の姿を描くことができた。これまで一つの城下町に存在する墓標を悉皆調査した例はなく、墓標・過去帳ともに、1 万人を越す被供養者を対象に行った各種の分析からは、個人・家・藩（地域）・国家を繋ぐ社会構造が浮かび上がってきた。

(2)鎖国体制下、四口のひとつとして近世日本の中で特異な位置を占めていた松前の独自性は、主として、松前が城下町でありながら、小さな藩の経済的枠組みをはるかに越えた商業都市であったことと、近世国家の政治的境界領域に位置していたことによって生じたと考えられる。松前では、藩主家や上級家臣層を除き、江戸時代を通して維持され続ける家が非常に少ない。近世社会にあっては異常ともいえる住民の高い流動性は、今後、詳細な比較を要するが、同じく定着率の悪さが指摘される江戸に近いと推測される。一方で、江戸とは異なり、松前では、どの寺院にも上級家臣の墓が営まれるとともに、一つの寺院内墓地では中・下級武士と町人の墓が混在する傾向にある。松前では、城下町に関して武士と町人の混住度の高さが既に指摘されており、そうした現世の傾向が、墓制にも反映されたと見て良いであろう。

(3)稲作を中心とする農業を基盤とした近世期、不作は飢饉に直結する可能性が高いなか、

農業生産をほとんど行わず、海産物以外の食料を輸入していた松前が、米どころとして知られる弘前藩よりも飢饉による人的被害が軽微であったことが、墓標・過去帳の比較を通して明らかになった点も重要である。農業生産に依拠しない松前は、飢饉の際にも他所とは事情が相当異なっていたといえる。

(4)松前と北陸・西日本との結びつきは、墓標型式と墓標に使われた石材に現れている。松前の墓標は、18 世紀以降も櫛形が主流を占めている点で中国地方など西日本との共通性が高い。また、角柱形に関して頭部が「台状」に作り出されている点で、「四角錐」を主体とする関東地方とは異なり、関西地方との共通性が高い。さらに松前には、北陸地方に起源をもつ越前式石廟や一石位牌形墓標が存在する。藩主松前家墓所をはじめ、松前でみられる福井産の笏谷石で作られた越前式石廟は、様式・技術いずれの点から見ても、越前で作られ、松前では組み立てのみ行われた可能性が高いことが判明した。

(5)松前では主体となる墓標石材が、17 世紀には笏谷石であったものが 18 世紀には花崗岩へと切り替わっている。花崗岩の産地は確定できていないが、瀬戸内である可能性が高い。松前と大坂とを結ぶ海運は、河村瑞賢による寛文 12 年(1672)の西回り航路開拓以降、越前敦賀で陸揚げし琵琶湖水運を経るルートから、下関を経由し瀬戸内沿いに大坂に直航するルートへ切り替わったとされる。松前の墓標に関して、花崗岩が笏谷石を初めて上回るのが 1670 年代であり、笏谷石から花崗岩への変化は、日本海交易のルートの変更と関連づけられよう。

(6)近世日本社会全体に共通する普遍性は、家に関して顕著である。すなわち松前でも次第に家意識が高まり、他地域に比べやや遅れるものの、近世後期には家族墓が確立するとともに、子供の墓標が急増する。家族墓の確立により、墓標の普及が促進される一方、墓標は、家族墓に相応しい多面利用に適した形態に変化し、家紋や「先祖代々」の文言が墓標を飾るようになる。松前藩の上級武家では、家区画内における墓標の位置や墓標型式、戒名の格に厳格な家内秩序が存在することが明らかとなった。近世の家を理解する上で、墓制上の家内秩序の実態を、今後、全国的に追求する必要があろう。

(7)松前の近世社会が幕府による第 1 次蝦夷地直轄期(1807～1821 年)を挟んで、その前後で最も大きく変化したことを確認できた。松前藩が成立した 17 世紀初めから奥州梁川に移封される 19 世紀初めまでの約 200 年間、松前の近世社会に根本的変化はなく、梁川移封という「外圧」により初めて社会の根幹を揺るがす変化が生じたと言い換えられよう。そしてこの変化は一時的なものではなく、復領後より一層加速する。変化の背景に、松前稼や蝦夷地警備に伴う、奥羽諸藩から松前・蝦夷地への人の流入があったことが、墓標や過去帳の分析から裏付けられた。

(8)一つの城下町に存在する全ての近世墓標や寺院過去帳を悉皆調査した研究はこれまでになく、その意味で重要なデータが得られた。

(9)本研究は、近世墓標を新たな視点を交えて多角的に分析しており、新たな墓制研究の方向性を示すことができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①<u>関根達人</u>、佐藤雄生、出土近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化、日本考古学、査読有、28 号　、2009、pp. 69－87

②<u>関根達人</u>、近世墓標に現れた自己意識―松

前藩の事例分析に基づいて―、歴史、査読有、112 輯、2009、pp.91－118

③関根達人、市毛幹幸、カラフトアイヌ供養・顕彰碑とクシュンコタン占拠事件、弘前大学國史研究、査読無、124 号、2008、pp.1－22

④関根達人、澁谷悠子、墓標からみた江戸時代の人口変動、日本考古学、査読有、24 号、2007、pp.21－39

⑤藤田俊雄、関根達人、東京都港区金地院遠野南部家 28 代義顔墓所改葬報告、岩手考古学、査読無、19 号、2007、pp.113－126

〔学会発表〕（計４件）

①関根達人、北日本（北海道・青森県・岩手県域）における江戸時代後期の陶磁器の流通、第19回九州近世陶磁学会、2009、佐賀県立九州陶磁資料館

②朽木量、近世墓標研究の成果と総合的な墓制研究への期待、第845回日本民俗学会談話会、2009、成城大学

③関根達人、市毛幹幸、北海道松前町旧福山城下町における近世墓標調査とカラフトアイヌ供養・顕彰碑について、日本考古学協会第74回総会研究発表、2008、東海大学

④高木正朗、仙台藩村落の人口変動と共同性―土地所有権の移動からみた―、日本村落研究学会第 55 回大会・テーマセッション報告、2007、鹿児島県南大隅町中央公民館

〔図書〕（計２件）

①高木正朗、他、古今書院、18・19 世紀の人口変動と地域・村・社会、2008、300

②関根達人、無明舎出版、あおもり歴史モノ語り、2008、233

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

関根達人、他、近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究、平成 19 年度～21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、2010、322

６．研究組織

(1)研究代表者

関根　達人（SEKINE TATSUHITO）

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：００２４１５０５

(2)研究分担者

高木　正朗（TAKAGI MASAO）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：７０１１８３７１

（H19→H20：連携研究者）

谷川　章雄(TANIGAWA　AKIO)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：４０１６３６２０

（H19→H20：連携研究者）

朽木　量(KUTSUKI RYO)

千葉商科大学・政策情報学部・准教授

研究者番号：１０３８３３７４

（H19→H20：連携研究者）

村木　志伸（MURAKI SHINOBU）

東北芸術工科大学・芸術学部・元講師

研究者番号：１０３２６７５４

（H19 のみ）

(3)連携研究者

H20・21　上述の３名